

# 報告

## 日本医療コンフリクト・マネジメント学会

常任理事・医療安全部長 水谷 匡宏

今回で2回目となる標記学術大会が東京で1月26、27日の2日間にわたって開催された。まだ聞きなれない小規模の学会であるが、250名の医療関係者の参加があった。

冒頭のあいさつで、高久史麿学会理事長は、患者家族と医療者がともに創るよりよい関係を実現するため、科学的知見の練磨と自由な議論の場を提供したいとの設立趣旨を述べた。またこの医療を巡るコンフリクト（認知、見解の齟齬）をマネジメント（乗り越えの支援）していくあり方について科学的・実証的視角から、学術的な検証を重ねていくためのフォーラムが必要であるとも述べた。

今回のテーマは「新たな協調関係の創造に向けて」であり、伊藤雅治大会長（全国社保連合会理事長）の「医療有害事象発生時の病院の対応の在り方について」の講演から始まった。その中で、医療提供者

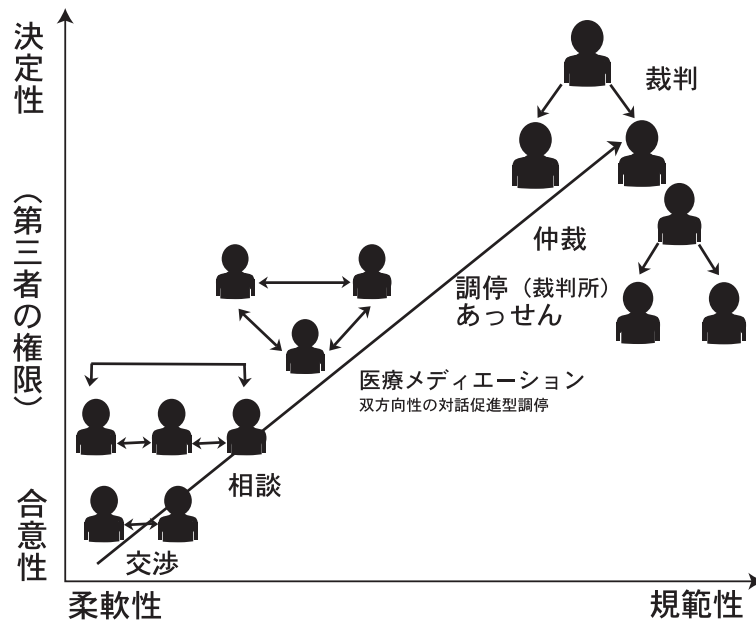
と受給者が互いに対話を通してよりよいパートナーシップを築き、医療スタッフ同士が良好なコミュニケーションのもとで協働していくことが、安心、安全な医療の資質の向上にとって不可欠な条件で、患者アドボケート研修（患者の立場を支えるプログラム）により医療者の負担軽減と医療環境の改善、最終的には医療者自身の保身につながると述べた。具体的には、有事（齟齬）が発生した時には、事実関係の説明は、院内において十分な調査・検討を行った後、病院として統一見解を整理してから行うことが重要であり、真実説明として、隠さない、逃げない、ごまかさないと基本方針であると結んだ。

続いての特別講演では、ペンシルバニア大学教授のエドワード・バーグマン氏が「臨床倫理とメディエーション」と題して講演を行った。その中で、医療メディエーター（仲介者）は情報を収集・伝達し、不確実性に対処し、齟齬の解決へ向け対話促進、交渉、ないし上級メディエーターとしてのトレーニングを受け、熟達しなければならないと述べた。

その他シンポジウムが4題（謝罪・情動・コミュニケーション、情報開示と対話、Health related QOL、事例分析ワークショップ）、一般演題が16題発表され、持ち寄った有害事例について熱心な討議が行われた。



会場の熱心な傍聴者を拝見するたびに、この学会がさらに大きく発展していきだろうとの強い印象を持って会場を後にした。



※中西淑美山形大学総合医学教育センター准教授の論文より一部抜粋

図 医療メディエーションと実践者教育